

語人声天

日

選手は本意でないだろうが、負けることで注目を集めるチームもある。おととい閉幕した野球の東京六大学リーグで東大の連敗は引き分けをはさんで56に伸びた。過去最多の94ほどではないものの、新チームは勝利を経験した選手が不在で迎えることになる▼手をこまぬいてきたわけではない。今年度は東大から初めてドラフト指名され中日で活躍した井手峻監督(76)が指揮をとった。

引き受けた当初はそのレベルに驚いたという▼「私の時代と違う。選手は豊富な知識があり、科学的な練習で基礎体力も上がっている。学生コーチ主体の練習も無駄がない。でも勝てない」。他大学は2番手、3番手投手でも時速150^キ近い速球を繰り出す。東大の進化以上にリーグもレベルを上げている▼その背景をたどれば受験の関門の高さにいきつく。

推薦制度を活用するところに比べ、部員約1000人の6割は浪人経験者だ。しかし、敗れてもなおプライドは失わず、この「宿命」を選手が言い訳にすることはない▼学生スポーツの純粹さを引き合いに出すのは気がひけるが、グッドルーザー(よき敗者)の精神を失ったかのような超大国のリーダーの振るまいをみれば潔さは際立つ▼さて東大の突破口はどこにあるのか。「妙案はない。細かい努力を一つ一つ積み重ねるしかない」と井手監督。自己を冷徹にみつめ、足らざるものを補い、あきらめることなく挑み続ける。そのアイデンティティーはリーグに一つの明確な魅力を加えている。